

研究課題 (テーマ)	助産師が産後 2 週間健診において継続した支援が必要と判断する視点		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部看護学科	准教授	村田美代子
研究結果の概要			
<p>目的：産後 2 週間健診を担当する助産師が母親に支援が必要と判断する視点を明らかにする。</p> <p>方法：A 県内の分娩取扱施設に勤務し産後 2 週間健診を担当する助産師 12 名を対象に半構造化面接を行った。データから「助産師が母親に支援が必要と判断する視点」を抽出しコード化した。類似性、関連性、相違性に基づいてカテゴリー化した。</p> <p>結果：研究対象者は 12 名の助産師であり、平均年齢は 41.7 歳、経験年数は 18.7 年、産後 2 週間健診の担当平均経験年数は 5.1 年で、7 名が開始時から担当していた。産後 2 週間健診を担当する施設内基準は概ね 3 年以上であり、設定していない施設もあった。産後 2 週間健診を担当する助産師が母親に支援を必要と判断する視点は、【母親の精神状況】【産後の身体の回復状況】【母親の状況を捉えるための直観的視点】【授乳の状況】【サポートの現状】【児との愛着形成】【児の健康状態】【退院後の生活】【家族との関係性】の 9 つの視点からなっていた。</p> <p>考察：【母親の精神状況】【産後の身体の回復状況】【授乳の状況】の 3 つの視点は、厚生労働省が示す産後健診の把握項目に含まれており、本研究で明らかになった視点は、産後健診の目的に沿ったものであるといえる。さらに、【サポートの現状】【児との愛着形成】【児の健康状態】【退院後の生活】【家族との関係性】といった、母子関係や母親の社会的背景にも目を向けており、母親を Bio・Psycho・Social の観点から包括的に捉えて支援の必要性を判断していることが示唆された。また、これらの視点を補完するものとして【母親の状況を捉えるための直観的視点】が挙げられる。これは、助産師がこれまでに培ってきた経験や知識に基づき、支援の必要性をさらに判断しているものと推察される。産後 2 週間は産後うつ病の発症リスクが高い時期であることから、早期発見および予防の観点において、育児期の母親に対する切れ目のない継続的支援の提供は重要である。今回明らかとなった視点は、助産師の経験年数にかかわらず母親の状態に気づき、適切に判断し、支援の取りこぼしを防ぐために、これらの視点を言語化し、共有していくことが重要である。</p> <p>結論：産後 2 週間健診において助産師が母親に支援の必要性を判断する視点は、母体の身体的回復、授乳状況、精神状態を含め、母親の状況を包括的に捉えるものであった。</p>			
今後の展開			
<p>今回明らかとなった直観的視点を言語化し、アセスメントツールの作成・活用・評価を行うことで、助産師の経験の違いにかかわらず、限られた健診時間の中でも母親に必要な支援の提供につなげることができると考える。また、産後 2 週間健診や産後 1 カ月健診においても同一の視点を共有することで、各施設や地域における継続的な支援の実現や、多職種連携への活用を図っていきたい。</p>			